福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1007集

南八幡遺跡群 8

—南八幡遺跡群　第15次調査—

２００８

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が培われ、今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、やむをえず破壊される遺跡については発掘調査を行なって、往時の有様を後世に伝えています。

本書は平成18年度に行ないました、南八幡遺跡群第15次調査の成果について報告するものです。本書が皆様の地域の歴史に対する御理解の一助となり、また歴史学、考古学上の研究資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において、費用の負担など多大な御協力を戴きました、住友不動産株式会社をはじめとする関係各位に深く御礼申し上げます。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田裕嗣

―凡　例―

・本書は福岡市教育委員会が2006年7月10日から9月29日にかけて行なった南八幡遺跡群第15次調査（博多区寿町2丁目97番他）の報告である。調査は蔵冨士寛が担当した。
・本書3－(4)石器については、本教育委員会吉留秀敏の実測・執筆による。他の編集、執筆は蔵冨士が行ない、遺物の実測、図版のトレースについては米倉法子の手を煩わせた。
・本書における方位は磁北であり、遺構についてはSC（住居）、SK（土坑）、SP（柱穴）等の略号を使用している。
・本書に関わる資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

目　次

Ⅰ．はじめに…… 1

1．調査に至る経緯…… 1

2．調査の組織…… 1

Ⅱ．位置と環境…… 2

Ⅲ．調査の記録…… 4

1．調査の方法・遺跡の概要…… 4

2．遺構・遺物…… 5

Ⅳ．まとめ……17

挿図目次

図1　周辺の調査(1/2,500)……2
図2　周辺遺跡(1/25,000)……3
図3　調査場所(1/400)……4
図4　遺構配置(1/200)……5
図5　ＳＣＯ１出土遺物(1/3,1/2)……6
図6　ＳＣＯ１・Ｏ２(1/60)……6
図7　ＳＣＯ２出土遺物(1/3)……7
図8　ＳＣＯ３(1/60)……8
図9　ＳＣＯ３出土遺物(1/3)……8
図10 ＳＣＯ９(1/60)……9
図11 ＳＣＯ９出土遺物１(1/3)……10
図12 ＳＣＯ９出土遺物２(1/3)……11
図13 ＳＣ１０(1/60)……12
図14 ＳＣ１０出土遺物(1/3)……13
図15 ＳＣ１１(1/60)……13
図16 ＳＣ１１出土遺物(1/3)……14
図17 ＳＣ１２(1/60)……15
図18 ＳＫ１３(1/50)……15
図19 ＳＤ・ＳＰ出土遺物(1/3)…… 16
図20 出土石器(1/1)……17

図版目次

図版１　上調査区北半(北東から)
中調査区南半(北東から)
下ＳＣＯ１・Ｏ２(北から)
図版２　上ＳＣＯ３(北から)
中ＳＣＯ９(南西から)
下ＳＣＯ９完掘(西から)
図版３　上ＳＣ１０(南東から)
中ＳＣ１１(北西から)
下ＳＣ１１(北東から)
図版４　上ＳＣ１２(北東から)
中ＳＣ１２(南東から)
下ＳＫ１３(北西から)
図版５　出土遺物

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成18年2月27日、住友不動産株式会社より、博多区寿町2丁目97番他における共同住宅建設に関して、埋蔵文化財課に対し埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地（南八幡遺跡群）内であることから、埋蔵文化財課では確認調査を行ない遺構の存在を確認した。この結果を受けて、両者協議の結果、建築による遺跡への影響は避けられないということになり、発掘調査による記録保存で、対応することとした。

調査の開始は平成18年7月10日で、9月29日にすべての作業を終了した。調査にあたって、住友不動産株式会社をはじめとする関係各位には、多大な御協力をいただいた。記して感謝したい。

2．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託　住友不動産株式会社
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　平成１８年度　埋蔵文化財第１課　課長 山口譲治
　　調査係長 山崎龍雄
　　平成１９年度　埋蔵文化財第１課　課長 山口譲治
　　調査係長 米倉秀紀
調査庶務　平成１８年度　文化財管理課　鈴木由喜
　　平成１９年度　文化財管理課　鈴木由喜
調査担当　蔵冨士寛
調査作業　相川春彦　石川洋子　伊藤美伸　小野山次吉　川田強司　坂梨美紀　渋谷一明
　　芹沢淳子　花田直文　濱地静子　遠山　勲　徳山孝恵　中村恵子
整理作業　柴田加津子　萩本恵子　米倉法子

遺跡名	南八幡遺跡群　第15次				
遺跡調査番号	0630		遺跡略号	MHM-15	
地番	博多区寿町2丁目97番他		分布地図記号	13 雑餉隈　12 麦野	
開発面積	1.203m²	調査対象面積	763m²	調査面積	789m²
調査期間	2006.7.10～2006.9.29				

Ⅱ．位置と環境

南八幡遺跡群は福岡市域の南端部に位置し、著名な須玖・岡本遺跡群の存在する春日丘陵の東側にある台地上に存在する。台地の東側には御笠川、西側には諸岡川が流れ、これら河川の開析により、この台地は独立丘陵上を呈している。また、台地の北西側を中心に多くの谷が入り込んでおり、台地自体はいくつかの舌状を呈しているのである。現在、この舌状台地上にはすべてに遺跡が営まれて入ることが確認されており、福岡市教育委員会ではその台地ごとに遺跡の把握が行い、麦野A～C遺跡、南八幡遺跡群、雑餉隈遺跡といった名称を付している。

南八幡遺跡群は台地の南側に位置するもので、これまで14次にわたる調査が行なわれている。今回報告する第15次調査は、南八幡遺跡群のほぼ中央部に位置し、北側では第4・5次調査、南東側では第9次調査がそれぞれ行なわれている。

第4次調査では奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物（大庭編1992）、第5次調査では弥生時代後期の竪穴住居（白井1996）が、第9次調査では弥生時代後～終末期の竪穴住居・掘立柱建物、奈良時代の竪穴住居・土坑などが検出されている。特に第9次調査における弥生時代住居址から出土したガラス玉、辰砂粒などは注目すべき遺物といえる（小林編2004）。

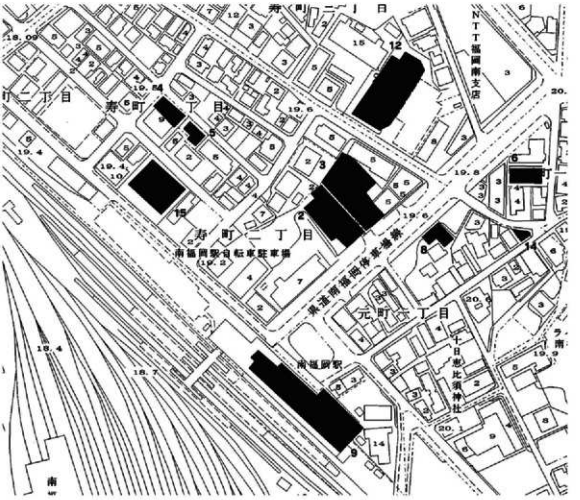


図1 周辺の調査（1/2,500）

文　献

大庭康時編1992「南八幡遺跡２」―南八幡遺跡群第４次調査報告―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第277集

小林義彦編2004「南八幡遺跡５」―南八幡遺跡第９次調査の概要―　福岡市埋蔵文化財調査報告書 第641集

白井克也1996「南八幡遺跡群第５次調査の記録」「井尻B遺跡４　南八幡遺跡４」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第441集

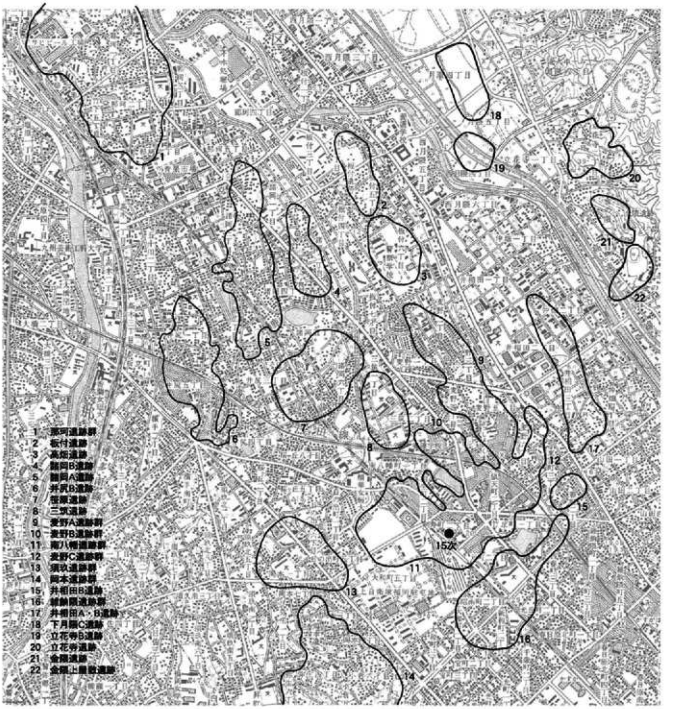


図2 周辺遺跡 (1/25,000)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の方法・遺跡の概要

調査はまず、重機による表土剥ぎから開始した。現地表下30cmで検出された明赤褐色ローム土上を遺構面と設定し、調査を開始している。調査の途中、ローム上において、旧石器時代の遺物(角錐状石器)を1点確認したため、その地点を中心にグリッドを設定し、旧石器時代の遺物確認にも努めたが、これ以上の石器を採取することはできなかった。

今次調査では竪穴住居7軒、土坑、ピット群を確認した。遺構の遺存状況があまり良くなかったためか、出土遺物は土師器、須恵器などコンテナ9箱ほどと少ない。竪穴住居はいずれも弥生時代終末～古墳時代前期にかけてのものである。いずれも方形を呈するもので、いくつかはベッド状遺構を有している。住居の多くは部分的に検出できたに留まり、全形を窺うことができるものは、2軒(SC03・11)に過ぎない。また、その他、注目される土坑として、落とし穴(SK13)の存在を挙げることができるだろう。ピットは数多く確認しているが、植物痕跡等も多く含まれる。今回の調査ではピットに有意な配列をみることができなかった。以下では、各遺構、および出土遺物について所見を述べる。

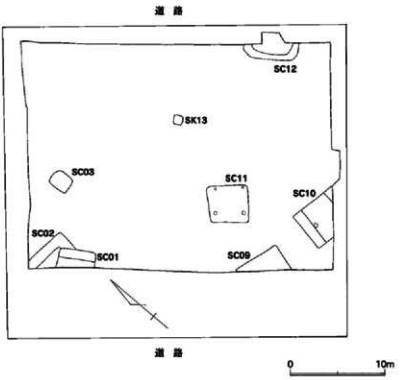


図3 調査場所 (1/400)

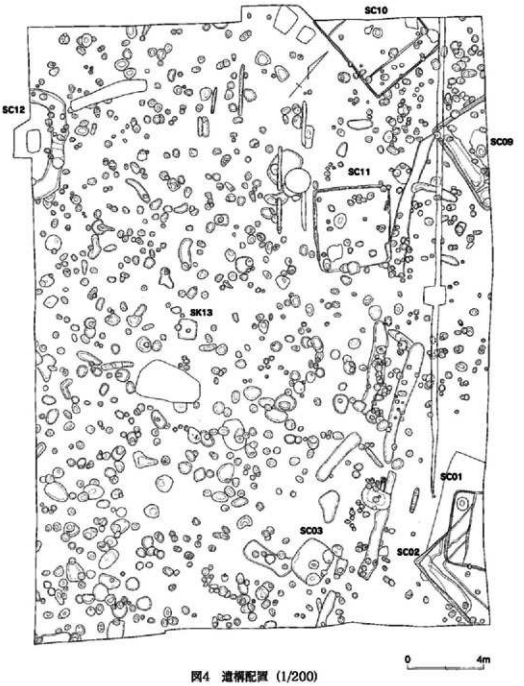


図4　遺構配置（1/200）

2．遺構・遺物

(1) 竪穴住居(SC)

竪穴住居は7軒確認した。内6軒は調査区東側にまとまって存在する。住居の全形を窺うことのできるものは限られているが、いずれの住居も平面方形を呈するものと考えられ、一辺4～5mほどの住居6、一辺2mの小形住居1という構成となっている。住居には軸を北西－南東方向にとるもの(SC01・11)と南－北方向にとるものの2者がある。これは必ずしも時期差を示しているわけでは無いようだ。ベッド状遺構の有無、そして形にも違いをみることができ、軒数の割には各住居は変化に富む。ところで、調査区東側で検出したSC12は、「住居」としたが、所在、形態など他の住居に比して違いが大きい。この住居については様々な点で再検討の余地があるだろう。

SC01（図6）

調査区南東部に存在する。SCO２の切り込んでおり、この住居に後出する。調査区内では１／２弱が確認できるに過ぎない。検出部分をみる限りでは、この住居は一辺3.8ｍ程の平面方形を呈するものと考えることができるだろう。住居西壁にそって、幅１ｍのベッド状遺構をみることができる。SC10の例をみれば、これは東西両壁に平行して付されているのかもしれない。床面およびベッド部分は地山（ローム土）の削り出しによるものであり、SC02との切り合い部分には暗赤褐色土（汚れたローム土）を充填している。遺構の深さは30cm程と決して遺存状況の良いものではなく、ベッド状遺構の上面も削平を受けている。住居の周囲には、壁溝が巡る。

出土遺物（図5）

出土遺物はごく少ない。1は台付椀等の台部片。2は砥石である。

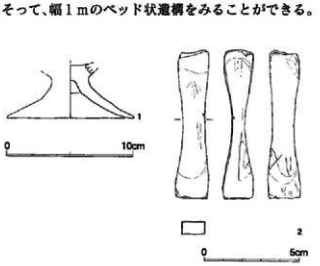


図5　SC01出土遺物（1/3、1/2）

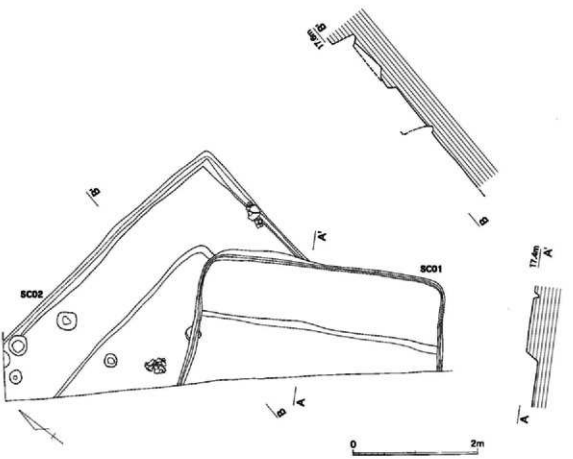


図6　SC01・02（1/60）

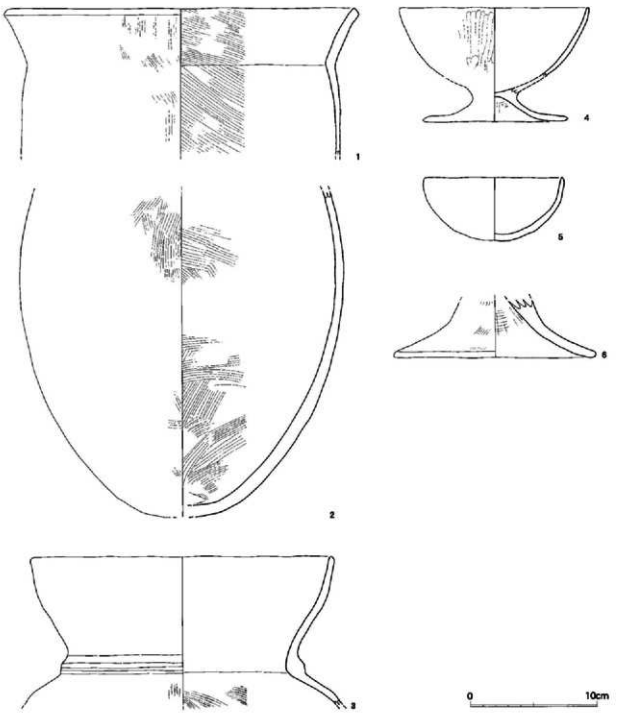


図7　SC02出土遺物（1/3）

SC02(図6)

調査区の南東部に位置し、SC01に切り込まれている。調査区内では1／2弱が確認できるに過ぎない。規模は不明だが、検出部分だけを見ても、一辺4.5mを越える方形の住居であることは確実であろう。各壁沿いには幅1m程のベッド状遺構が巡っており、現況では「L」字形を呈している。床面およびベッド部分の多くは地山の削り出しによる。ベッドの一部にのみ暗赤褐色土を充填している(貼床)。遺構の深さは20～30cm程と決して遺存状況の良いものではない。炉、および主柱穴の配置は不明である。

出土遺物(図7)

床面直上に遺物をいくつか確認することができた。1～3は甕である。1は口縁部片で、口縁部は「く」字に折れ曲がり、胴部の張りは弱い。内外器面にはハケ目調整を施す。2は甕底～胴部片。胴部は長く、やや丸みを有している。底部は丸底。内外器面にはハケ目調整を施す。3は口縁部片。口縁部は「く」字に折れ曲がり、端部ではわずかに内湾する。頸部には突帯を一条巡らしている。4は台付椀。杯部外面には一部ヘラミガキの痕跡が残る。5は椀。6は高杯等の脚部片である。

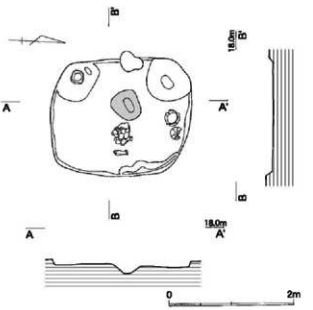


図8 SC03 (1/60)

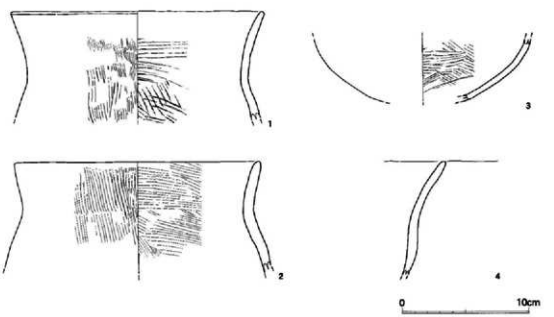


図9 SC03出土遺物 (1/3)

SC03(図8)

調査区南東側に存在する。平面は一辺2mほどの方形を呈するが、隅角はやや丸みを有しており、各壁も若干のふくらみを有している。中央の土坑には炭や焼土が含まれており、これが住居の炉に相当するのだろう。主柱穴の配置は不明である。遺構の掘りこみは10cmに満たず、遺構の残りは悪い。住居北東隅には壁溝が残っており、これは住居を全周していた可能性を考えておきたい。住居の床面は地山削り出しによる。床面直上からも遺物が出土している。

出土遺物(図9)

住居の遺存状況を考えれば、多くの遺物を検出することができた。1･2･4は甕である。いずれも口縁部片で、頸部の屈曲が弱く、胴部の張りも少ない。1は口径19.6cmを測り、内外面にはハケ目調整を施す。2は口径19.2cmを測り、内外面には同じくハケ目調整を施す。4は摩滅が激しく調整不明。3は壺等の胴部片。内面にはハケ目調整を施す。

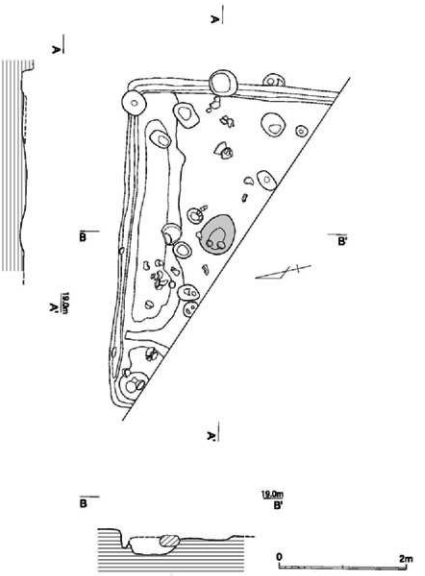


図10　SC09 (1/60)

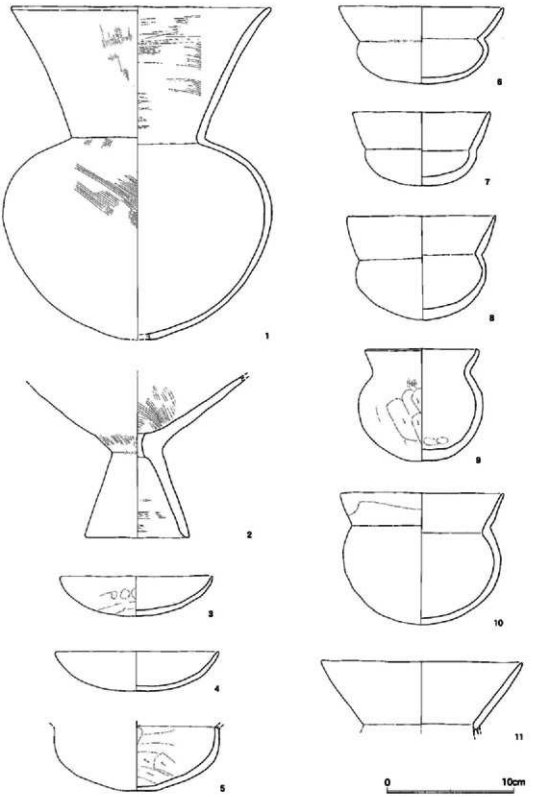


図11　SC09出土遺物1 (1/3)

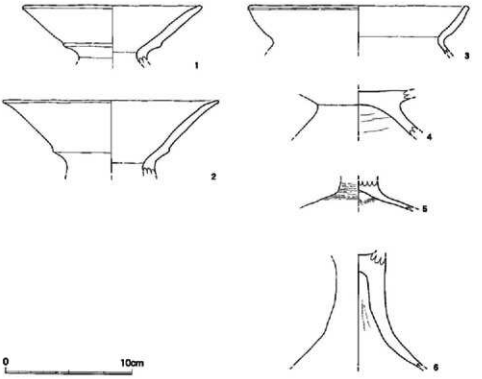


図12　SC09出土遺物2（1/3）

SC09（図10）

調査区の北側に存在するもので、住居の一部が部分的に検出できたに過ぎない。検出部分をみれば、この住居は一辺5.2m程の平面方形を呈するものといえるだろう。遺構の深さは20cmにも満たず、遺存状況は悪い。住居中央にある土坑からは多くの焼土、炭が検出でき、これが炉に相当するのだろう。床面は地山の削り出しによるものであるが、住居北辺に沿って帯状の落ち込みがあり、焼土をブロック状に含んだ暗褐色土が充填されている（貼床）。貼床部分には台石を据える。住居の周囲には壁溝が巡っている。

この住居には他の住居に比して、変わった点がいくつかある。まず、住居覆土や貼床など、焼土ブロックが多く含まれていることである。また、一部床面には焼土が広がっていた。次に多くの土器が出土していて、その器種が甕・壺といった日用具では無く、丸底壺、器台、長頸壺などに偏りをみせる点である。この住居の性格解明のため、焼土部分などいくつかの覆土をサンプリングし、ふるいにかけてみたが、土器の細片以外、見つけることはできなかった。

出土遺物（図11・12）

1は長頸壺である。「ハ」字に直線的に開く口縁部を有し、胴部は丸みを帯びる。2は台付甕の底部片である。細く「ハ」字に開く台部を有し、底部は穿孔されている。3・4は椀。3は口径12.0cm、4は口径12.8cmをそれぞれ測る。5～8は丸底鉢。10は丸底壺。15は脚付鉢の基部片。11は広口壺口縁部片。口径（復元）15.8cmを測る。12・13は器台口縁部片。いずれも杯部下面が段をなす。14は甕口縁部片。16・17は高杯脚部片。16は外面にヘラミガキを施す。

SC10(図13)

調査区の北側に位置するもので、全体の1／2強を確認することができた。遺構の深さは10～20cm程で、遺存状況は悪い。平面は5.3×4.5mの略方形を呈する。住居の東西壁側には幅1mほどのベッド状遺構を付している。住居の中央には土坑があり、多くの焼土をみることができる。これが炉に相当するのだろう。配置をみれば、炉の東側に存在するピットが主柱穴に相当すると考えてよいだろう。また、炉－主柱穴を結んだ軸線と対照的に配列する柱穴もいくつかみることができる(アミ部分)。ベッド部分及び床面は地山削り出しによるものであり、貼床は施されていない。住居の周囲には壁溝が巡らされている。

出土遺物(図14)

遺物の出土はごく少ない。1は壺等の底部片。2は高杯の脚部片である。

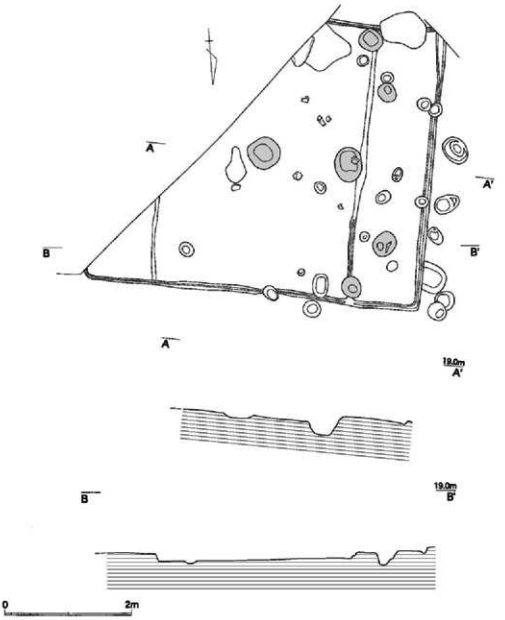


図13 SC10 (1/60)

SC11（図15）

調査区中央の北よりに位置する。全形を確認することができ、4.2×4.0mの平面方形を呈する。遺構の深さは10cm程で、遺存状況は悪い。地山はほぼ平坦にならされており、ベッド状遺構はなく、貼床は認められない。壁溝は住居の南側において、「コ」の字形に巡らされているのが確認できる。住居中央やや西よりの位置にある土坑からは焼土が検出されており、これが炉に相当するのであろう。そして、炉を中心に住居の四隅に配されているピットが主柱穴に相当するものと考えている（アミ部分）。

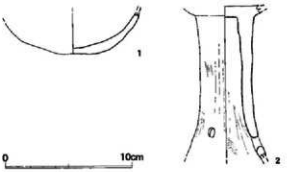


図14　SC10出土遺物（1/3）

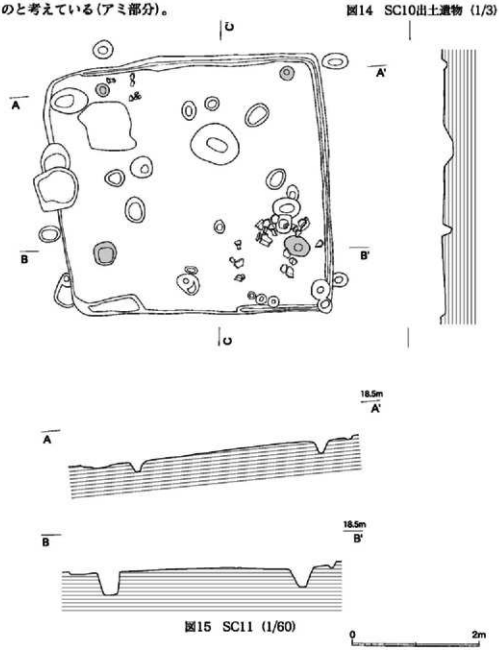


図15　SC11（1/60）

出土遺物(図16)

1～3は甕である。1は頸部の屈曲が弱く、胴部はあまり張り出さないものである。内外器面にハケ目調整を施す。2は頸部がくびれ、胴部がやや丸みを有するものである。外器面にはハケ目調整を施す。3は口縁部が「く」字に屈曲するものである。内外面にハケ目調整。4は器台の杯部。5·6は高杯杯部片。7は杏形支脚。頂部には穿孔。8は脚部片。

SC12(図17)

調査区西側で検出したもので、住居の一部を検出したに過ぎない。幅0.6～1m、深さ10cm程の浅い溝を「コ」字形に巡らしたものである。住居であれば、一辺5.8mほどの方形を呈するもので、隅部は丸みを帯びる。ピット等この遺構に確実に伴うものはない。溝からは、土器の小片が出土しているに過ぎず、図化は行なっていない。詳細な時期は不明だが、他の住居址と大差ない時期に比定できるだろう。

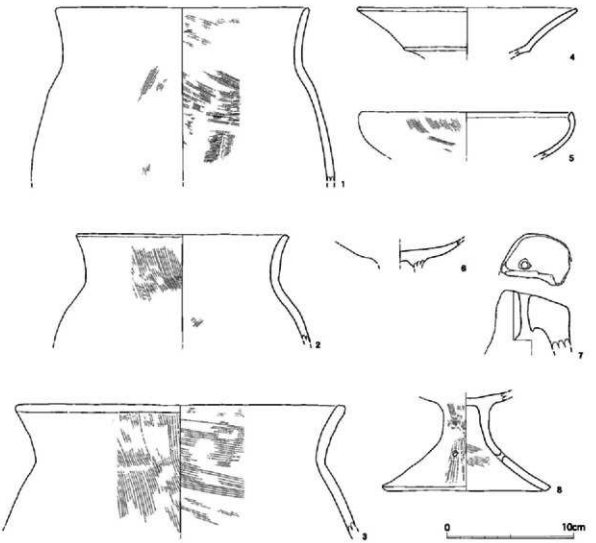


図16　SC11出土遺物 (1/3)

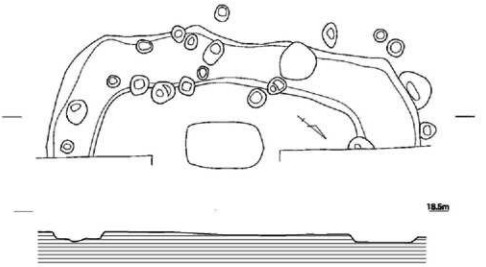


図17　SC12（1/60）

(2) 土坑(SK)

今回の調査では土坑もいくつか確認しているが、不定形で形の判然としないものが大半を占めている。その中で、明らかに人為的と考えられる土坑(SK１３)があり、以下にその所見について、述べることにしたい。

SK13(図18)

調査区ほぼ中央部で検出した。一辺１ｍほどの方形を呈するものである。壁面はほぼ垂直に掘り下げられており、深さは70cmほどを測る。底面は水平で、中央部には径20cmに満たない小穴が穿たれている。この穴は深く40cmにも及んでいる。形状をみれば、この土坑は落とし穴と考えることができるだろう。ただしこのような遺構は、調査区内ではこの1例しか確認できていない。

出土遺物はなく、時期は不明である。

(3) ピット群

ピットは調査区内全体にわたって広く認められるが、植物痕跡などの小穴も多い。今回の調査ではピットの配列に有為性を見出すことができなかった。ピットからは、ごく少ない量ではあるが、遺物がいくつか出土している。時期的には竪穴住居と等しい、弥生時代終末～古墳時代前期の遺物が多いが、一部奈良時代に属するものも認められる。

出土遺物(図19)

1は甕口縁部片である。頸部は「く」字に屈曲する。2は須恵器甕口縁部片。3は器台。4は須恵器杯の底部片。

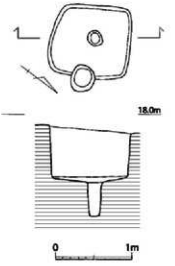


図18　SK13（1/50）

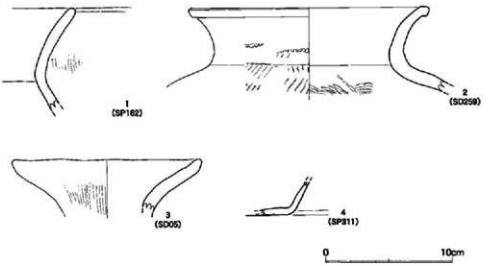


図19　SD・SP出土遺物（1/3）

(4)特記遺物

石器(図20)

これまで、南八幡遺跡群では複数の調査地点で旧石器時代の遺物や石器集中分布が確認されている。本調査でも1点の旧石器時代資料が出土したことから、確認のためグリッドにそって確認トレンチを設けレス層上部を精査したが、1点の遺物も出土しなかった。

今回の調査では3点の剥片石器が出土した。資料数が少なく、何れも後世の遺構内や遺構検出時であることから、本調査区外に主な包含層が存在し、そこからの混入遺物と推定される。

1は角錐状石器である。長さ4.8cm、幅2.8cm、厚さ1.5cmであり、完形品である。表面のパティナは著しく、基部に調査時のガジリがある。石材は不透明良質の漆黒色黒曜石であり、残された自然面から本来は円礫で西北九州産と推定される。不整形厚手の横長剥片素材とし、背面側に荒い調整を施し整形している。基部には自然面を残している。調整はすべて主剥離面から施され、右側二面後に左側二面の剥離を行なう。何れも基部側から先端の順である。なお、左側縁には微細な調整が施されている。2は石核である。幅2.7cm、高さ2.2cm、厚さ2.0cmを測る。表面の風化は少なく、石材は不透明良質の漆黒色黒曜石であり、自然面は平滑角礫状をなし伊万里市腰岳産と推定される。背面は素材分割面のポジ面であり、表面、右側面、頂面に剥片剥離面が残される。何れも不定形剥片が剥出されている。このうち右側面が最終剥離で潰れた階段剥離を呈する。3は石鏃である。小型で長さ1.2cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。右脚端を欠損する。表面の風化は少なく、石材は不透明良質の漆黒色黒曜石である。幅広の不定形剥片を素材とし、両面に入念な調整剥離が施される。

以上の遺物は遊離遺物であり、時期の判断は厳密には困難であるが、形態や調整からみて、1は後期旧石器時代後半期であり、2・3は弥生時代前期～中期前半に所属すると推定される。

（吉留秀敏）

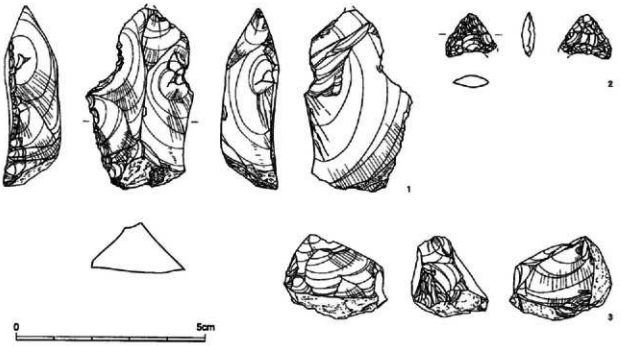


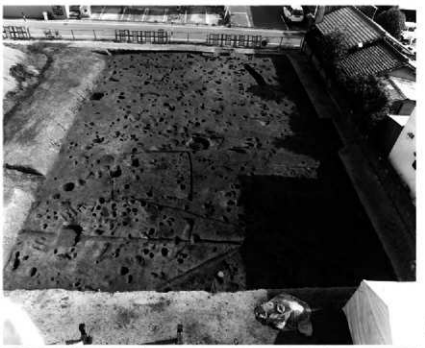
図20　出土石器 (1/1)

Ⅳ．まとめ

今回の調査では弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてのまとまった資料を得ることができた。検出した住居７棟の内、特に注目されるのがSCO９の存在である。他に比して多くの土器が出土しているが、壺、鉢、器台などが多く、むしろ甕が少ないという器種の偏りが認められる。サンプリングした住居埋土を精査しても、特別な所見を得ることはできなかったため、この住居の特異性について、多くを語ることはできないが、しかし、近隣の９次調査で確認された、住居出土のガラス玉や辰砂粒の存在を考えれば、SCO９の性格については、今後検討する必要があるのかも知れない。

SK13はその形状から落とし穴と考えた。ただ、確認できたのは１基のみであり、出土遺物も存在しないため、時期は不明である。旧石器時代の遺物についても、遺構検出中に発見した１点のみである。南八幡遺跡群内において、縄文時代以前における遺構や遺物はいくつか確認されており、今後も注意を払う必要があるだろう。

図版1



調査区北半（北東から）

調査区南半（北東から）

SC01・02（北から）

SC03（北から）

SC04（南西から）

SC09完掘（西から）

図版3

SC10（南東から）

SC11（北西から）

SC11（北東から）

SC12（北東から）

SC12（南東から）

SK13（北西から）

図版5

1. 図11-2　　2. 図11-6
3. 図11-8　　4. 図11-7
5. 図11-9　　6. 図12-2

報告書抄録

ふりがな	みなみはちまん
書名	南八幡遺跡群8
副書名	南八幡遺跡群　第15次調査
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1007集
編著者名	藏冨士　寛
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神1-8-1
発行年月日	平成20年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
みなみはちまん 南八幡遺跡群	ふくおかけんふくおかしはかたく 福岡県福岡市博多区 じゅうはちまち 寿町2丁目98番他	4013	0051	33° 32′ 37″	130° 27′ 37″	20060710 ～ 20060929	789	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南八幡遺跡群	集落	縄文 弥生 古墳	住居 落し穴	弥生土器 土師器	

要約

今回の調査では弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてのまとまった資料を得ることができた。検出した住居７棟の内、特に注目されるのがSCO９の存在である。他に比して多くの土器が出土しているが、壺、鉢、器台などが多く、むしろ甕が少ないという器種の偏りが認められる。サンプリングした住居埋土を精査しても、特別な所見を得ることはできなかったため、この住居の特異性について、多くを語ることはできないが、しかし、近隣の９次調査で確認された、住居出土のガラス玉や炭砂粒の存在を考えれば、SCO９の性格については、今後検討する必要があるのかも知れない。

南八幡遺跡群 8

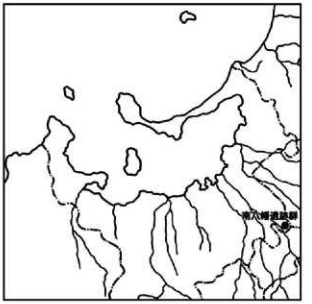
—南八幡遺跡群　第15次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1007集

2008(平成20年)年３月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　株式会社 月成印刷
福岡市博多区下呉服町５－27



遺跡略号　調査番号
MHM－15　0630

南八幡遺跡群8
―南八幡遺跡群　第15次調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一〇〇七集　二〇〇八
福岡市教育委員会